



# 久高島 結回の会

## 神の島より祈りを込めて…おばあが紡ぐ平和の輪

きっかけは、市が管理する案内所での観光ガイド募集。久高島では70歳まで現役という考えがあるが、その年まで続けられる仕事がない状態にある状況でもあったため、「これは、いい機会だ!」とひらめく。島のことに詳しいおじい・おばあをガイドとして雇用できないだろうか。そして、古くから島に伝わる民具作りを習い、次の世代に受け継ぐ場としても活用できたら。観光のネタにもなるし、どうだろう…。アイデアが形になり、企画書に

まとめあげて申請したところ、晴れて採用となった。こうして事業がスタートしたが、やがて市の事業の期限が切れ、活動が継続できなくなることに。せっかく見つけたおじい・おばあの生きがいであり、島の伝統を次世代へ繋ぐ大切な取り組みである。このままなくしてしまうのは惜しいし、もっとやりたい。それならば自分たちで動いてみよう!と奮起し、「結回の会」が結成された。

## 生活に根差した大切なお守り「ガンシナ注連縄(しめなわ)」

おじいさんが縄を編みながら「これは久高島のお守りなんだよ。」と観光客に声をかけると、しばし立ち止まり、お守りの由来についての説明に熱心に耳を傾ける。

島の植物(カヤ、レモングラス、月桃)で編まれたまあいガンシナは、その昔、水の乏しかった久高島で女性たちが毎日の水汲みをし、頭に掛けて運ぶ際に身体を守り安定させていたもの。それは道具であると同時に、天の恵み“水”を通じて神様と自分たちとを結んでくれる大

切な存在であり、日々の生活の営みを守る大切な「お守り」でもあった。

また、ガンシナを注連縄(しめなわ)に仕立てるには、島の麦とクバを使う。麦は、大きな実りをもたらしてくれるもの、クバは神の木にも例えられるものであり、その1つ1つに由来やストーリーがある。それらを、健康と平和の祈りを何十年も繋いできたおじい・おばあが丁寧に作りこんでいるのだ。



ガンシナ注連縄作りの作業場もある、会の拠点

## 見守りにも繋がる毎週水曜日の集い

ガンシナ注連縄はオンラインでの購入も可能となっており、新聞やTVの取材が入ったのを機に問い合わせは驚くほど増え、去年は200個を用意したが、希望する全ての人には届けられなかった。日々、島を守ってくれている植物を使うため素材にも限度があるし、全て手作業で作られているので、無理もできない。それでも、「購入はできなかったけど、ガンバってね。」と応援してくれる方もいて、とてもありがたい。

カテゴリー 文化・伝統継承／観光・地域交流

住 所 南城市知念字久高231-4

設 立 2019年

人 数 6名

主な活動 ガンシナ注連縄(しめなわ)作りを通した高齢者の生きがい・居場所作り

利用施策 地域づくりイノベーション事業(R2~3年度)

毎週水曜日に作業場で行っている活動に皆で集まること自体、おじい・おばあの見守りに一役買っているが、丹

精込めて作り上げたものを心待ちにしてくれる方がいることは、大きなやりがいや生きがいにも繋がっている。

## 命の恵みにみんなで感謝!「ハタスの学校」

島の中央付近にあり、かつて島に流れ着いた麦が播かれたと伝えられている「ハタス」。島にあるものから学んでいくという思いを込めて「ハタスの学校」と命名し、ここでは麦の生産を行っている。

種おろしから麦踏み、収穫、そして麦をいただくまで、島の子どもたちに学校の先生、診療所の方や、おじい・おばあ、ていーがしー(=手を貸す)隊と呼ばれる島外ボランティアの方も混ざって、共に汗をかいている。

収穫した麦を使って、健康の源である神酒やパン・クッキーなど、まずは島で消費されるものを作り、ゆくゆくは、島の学校給食でも食べてもらえるオリジナルレシピの準備も進めていきたいのだそう。



## おじい・おばあが健康で輝いていること、それが島の幸せ

島を訪れる観光客は年々増えているが、観光に向けた積極的なPRは今後も予定しておらず、「おじい・おばあ健康=島の幸せ」という考え方に変わりはない。健康で長生きできる幸せを分けてあげたいと思っているし、そういった魅力的な精神文化に、多くの人々が惹きつけられているのだろう。

また、おじい・おばあとの会話を楽しんでもくれる方達も多くいるため、縁側にやかんとお茶碗を置いて、「少し休んでいきなさい〜」といった昔ながらの「ゆくいどころ

(=休憩所)」を設置して迎えることができれば、とも考えている。

会の中心メンバーである副会長の古堅苗さんは、島の伝統継承のため、日々の活動を振り返って最後にこう語ってくれた。「島を守ってくれた、おじい・おばあの言葉を大切に。そして、いちゃりばちよーでー(=一度会ったら皆兄弟)、ゆいまーる(=助け合う)、命どう宝(=命こそ宝)を胸に、これからも皆で一緒に輝いていきたいですね。」